

ブックレビュー

知識の担い手や 流通形態から描き出す 知と情報の変革の歴史

評者 小林傳司

知識の社会史
知と情報はいかにして商品化したか
ピーター・バーク著 井山弘幸／城戸淳訳
四六判 408ページ
新曜社 3570円(税込)



「タイトルを読む時間さえないほどたくさんの本」があると嘆いたのは、16世紀イタリアの文筆家だったそうだ。本書を読むと、ヨーロッパの近代初期に知識の爆発的増大が起り、それに伴って既存の知識体系や制度の再編が生じていたことがよくわかる。本書は原著の副題に「ゲーテンベルクから百科全書まで」とあるように、15世紀から18世紀のヨーロッパ近代初期の知識の社会史を扱ったものである。

本書の主張を要約すれば、「いわゆるヨーロッパ近代初期の知的革命と言われる、ルネサンス、科学革命、そして啓蒙主義は、いずれもある種の大衆的で実用的な知識が次第に表面化し(とりわけ活字化され)、何らかの学問的な機構により合法化したこと以上のものではない」ということになる。これを裏付けるために動員される文献(二次文献をもとにしていると著者は謙遜するが)は膨大で、登場する人物は500人にも上る。長年、ヨーロッパ近代の文化史研究に携わってきた著者

の本領發揮とも言うべき著作である。

「知識」という概念は厄介であり、哲学的分析に巻き込まれると際限がなくなるが、著者は穩当かつ健全な、しかしある意味大胆な路線をとる。すなわち、「社会の中で知識として流通しているものすべて」という社会学的定義を採用するのである。その結果、いわゆる学者やエリートの「専門知」だけではなく、技やノウハウといった非言語的なものや博物館の蒐集物、民衆の知恵や旅行のガイドブックなど現代では「情報」と呼ばれる実用知までが「知識」に含まれ、それらの知識が「学問」の知へと合法化される過程が説得力をもって語られることになる。

12世紀以来、大学は高等教育を独占し知的権威の座にあったが、ルネサンス、科学革命、啓蒙主義という知的革新運動の挑戦を受けることになった。これは大学からすれば非正統的知識の合法化運動を意味していたのであり、したがって、こういった活動は大学という制度の外部のアカデミーなど

で営まれ、大学はどちらかといえばこれに敵対し消極的に適応していった。これはもはや通説ではあるが、しかし、产学連携や分野横断的な研究といった、現代の大学に新たな展開と改革を求める外部の声を思い浮かべると、なかなかに興味深い。逆説的にいえば、大学はやや保守的にゆっくりと社会の要求に適応してきたという歴史を持っており、ある意味でしたたかで優れた制度なのかもしれない。

さらに本書は、こういった知的革新運動が印刷術の発展とともに知的世界に突きつけた変革が意外な部分にまで及んでいたことを教えてくれる。確かに、多様な種類の知が書物化されれば、その書物の分類に関して図書館は苦しむことになるだろう。「その他さまざま(miscellaneous)」という項目の出現は、これへの適応だった。百科事典の項目も、分類の困難からアルファベット順に並べられるようになった。これは、「学問の樹」に描かれていたような知識の伝統的な体系性や位階的秩序が維持できなくなったことの象徴である。アルファベット順を使用したディドロの『百科全書』は、個人主義的で平等主義的な世界観への転換を反映しつつ助長した政治的事業でもあった。

本書は、知識の中身ではなく形式、つまり知識の担い手、媒体、分類、蒐集法、記録様式、管理方式、流通形態に焦点を合わせることで、近代初期ヨーロッパの事例分析を超える射程を備えたものになった。読後、未来の歴史家が書くであろう『情報の社会史』の中で西暦2000年前後の時代はどのように描かれるのだろうか、と考え込まされた。(こばやし・ただし:南山大学)